

平成25年度
研究調査報告

【概要版】



四日市市教育委員会教育支援課

第392集 吉川 記代

小学校外国語活動における聞く力・読む力の育成に関する研究
～フォニックスを活用した実践を通して～

第393集 堀内 拓志

共同体感覚を育む「クラス会議」の活用に関する研究

第394集 古森 ゆかり 市森 幸子 渡辺 由紀

小学校における不登校及び不登校リスク群児童支援のあり方に関する一考察
～スクールカウンセラーの効果的な活用に焦点をあてて～



【研究報告 第392集】 概要版

小学校外国語活動における聞く力・読む力の育成に関する研究
～フォニックスを活用した実践を通して～

四日市市教育委員会教育支援課 研修・研究グループ 研修員 吉川 記代

1 研究の目的

小学校外国語活動において、フォニックス指導を行うことによって、子どもが自らの力で英語を聞き取る力や、文字を読む力を育成できることを明らかにしていく。

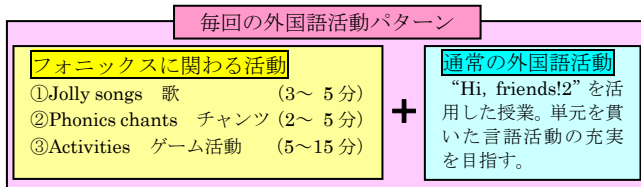
2 研究の内容と方法

(1) フォニックスとは

基本的な英語の文字の読み方指導の一つで、アルファベットとそれに対応する音との関係を学ばせる指導法のことである。フォニックスのルールを身につけることにより、文字や単語が読めるようになる。また、聞き取った発音から、その文字や単語を推察できるようになる。

(2) フォニックスを取り入れた小学校外国語活動

フォニックスの指導は、①ジョリー・ソング②フォニックス・チャンツ③ゲームの3つの活動に取り入れた。毎回の外国語活動の時間に、帯活動として、5分から20分程度行っていくこととした。



【フォニックスの活動を取り入れた授業モデル構想図】

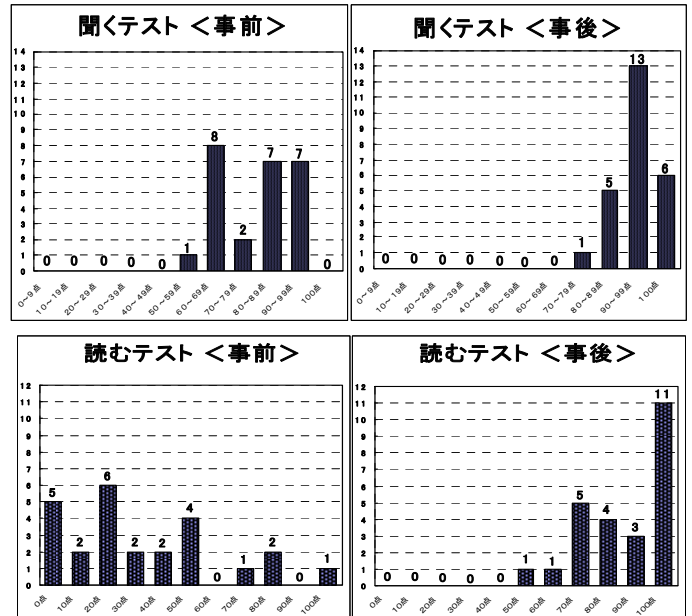
回	①歌	②チャンツ	③ゲーム活動
1	S・A	チャンツ① (A～I)	キーワードゲーム
2	T・I	チャンツ① (J～R)	キーワードゲーム・ミッシングゲーム
3	P・N	チャンツ① (S～Z)	キーワードゲーム・カルタ取り
4	C/K	チャンツ①文字だけ提示	神経衰弱・文字探し①
5	*復習	チャンツ①文字だけ提示	ペア探しゲーム・文字探し②
6	E・H	チャンツ①文字だけ提示	チェンゲーム・文字探し③
7	R・M	チャンツ② (A～Z)	キーワードゲーム・ミッシングゲーム
8	D・G	チャンツ② (A～Z)	カルタ取り
9	O・U	チャンツ②文字だけ提示	神経衰弱
10	*復習	チャンツ②文字だけ提示	ペア探しゲーム

(3) 効果の測定

検証授業前後で、児童アンケート・聞くテスト・読むテストを実施し、児童の英語活動に対する意欲と聞く力、読む力の変容を比較・分析する。

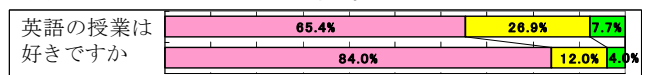
3 研究のまとめ

(1) 聞く・読むテストの結果より



フォニックス実践前と実践後を比較すると、聞く力・読む力とも顕著な伸びが見られることは明白である。正答率の平均をみると、聞く力に関しては、16.5%の伸びがみられ、読む力に関しては、53.6%も伸びているという結果が出ている。これは、ジョリー・ソングやフォニックス・チャンツを繰り返し行ってきたことにより、文字と音とのルールが自然に身についたことによるものと考えられる。また、身についたルールを活用してゲーム活動を行うことで、さらにルールが定着していったからであるとも考えられる。

(2) 児童アンケートの結果より



英語活動への関心・意欲も高くなったことが分かった。これまで文字と音との関係については学ぶ機会がなかった子どもたちが、フォニックスのルールを知ることにより、英語のルールや日本語との違いに気づくことができるようになる。また、身につけたフォニックスのルールによって、聞き取った英語からその綴りを推測したり、単語を読むことができたことが増え、達成感につながる。さらに、聞く力や読む力など自分の英語力の進歩を実感することで、知的満足感を得ることにつながる。そして、そのことがさらなる英語活動への関心・意欲につながったものと考えられる。

1 研究の目的

アドラー心理学に基づく「クラス会議」を活用して、自分達の課題を解決していくことで、共同体感覚を育成できることを明らかにしていく。

共同体感覚の育成を分析する。

- ① 実施前後の共同体感覚の評価アンケート
- ② 毎回の振り返り
- ③ 授業記録（発話数、議題の内容等）

2 研究の内容と方法

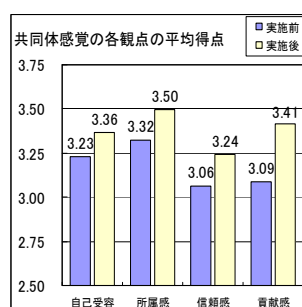
(1) 「クラス会議」とは

「クラス会議」とは、個人や学級生活に関わる問題を議題として、一人一人が問題解決のアイデアを出し合う話し合い活動である。特徴は、全員に発言権が確保されていることと議題提案者が最もよいと思う解決策を決めることである。定期的に話し合いをすることで共同体感覚の育成を図る。

過程	活動内容
1. サークル作り	○机を後ろに下げ、椅子で円を作り座る。
2. コンプリメント「ありがとうリング」	○友達への感謝の言葉（ありがとう）を簡潔に、一人ずつ発表していく。
3. 前回の振り返り	○前回の議題提案者が、前回の決定事項を試行してみた結果を報告する。
4. 議題の提示	○議題を読み上げ、議題提案者が話し合うかどうかを決める。
5. 解決策の話し合い	○一人一人が順番に解決のアイデアを言っていく。
6. 解決策の決定	○議題提案者が最良と思う案を決定する。

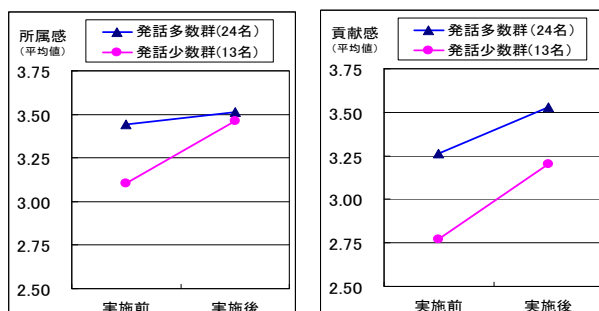
4 研究のまとめ

(1) 共同体感覚の各観点の平均値の変化



共同体感覚の評価アンケートの結果、実施後のほうが各観点の平均値がおおむね上昇した。「クラス会議」を活用することで共同体感覚が育成されたと考えられる。

(2) 発話数との共同体感覚との関連から



【発話数と所属感の相関関係】 【発話数と貢献感の相関関係】

発話数と各観点の関係を見ていくと、所属感と貢献感において発話少数群の値の上昇が顕著であった。このことから、「クラス会議」では、発話数に関わらず、共同体感覚を育成することにつながったと考えられる。

(2) 本研究における共同体感覚とは

共同体感覚とは、おおむね「私は共同体の一員だ。共同体は私を援助してくれる。私は共同体に貢献できる」という感覚である。

本研究では、共同体感覚を以下の4つの観点に整理して分析する。

- ① 「ありのままの自分でいい」という自己受容
- ② 「その集団の一員である」という所属感
- ③ 「他者を信じる」という信頼感
- ④ 「人の役に立っている」という貢献感

(3) データの収集と分析

分析方法は以下の3点のデータを収集し、共

(3) 議題の質の変化

「クラス会議」を進めるうちに、議題の質が変わっていった。はじめは自分自身の個人的な悩みが多かったが、徐々に自分に対する侵害行為についてのことが多くなっていった。「クラス会議」を繰り返すことで、安心して議題を出すことができるようになったと考えられる。「クラス会議」を実施することで、他者への信頼感を増すことにつながったと思われる。

1 研究の目的

本市小学校における不登校及び不登校リスク群児童に対応する支援の実態やスクールカウンセラー（以下SC）の活用状況、教員のSCに対するニーズやSCの教員に対するニーズを調査することを通して、本市小学校の現状に合うSCを効果的に活用した支援のあり方を考察することである。

2 研究の内容と方法

(1) 研究の概要

- ① 市内全小学校における不登校及び不登校リスク群児童への支援の体制やSCの活用状況を、アンケートにより調査する。（6月）
- ② 特色ある支援を行っている小学校を抽出し、不登校及び不登校リスク群児童への支援の体制やSCの活用状況について聞き取り調査を行う。（7月・11月）
- ③ 不登校及び不登校リスク群児童への効果的なSCの活用方法について、抽出校SCやSCを兼務している本市教育委員会セラピストへ聞き取り調査を行う。（8月～11月）
- ④ ①～③をもとに、本市の現状に合った不登校及び不登校リスク群児童へのSCを効果的に活用した支援の方法を探る。

(2) データの分析

- ① 「不登校及び不登校リスク群児童への支援の体制やSCの活用状況のアンケート」は、以下の2点から結果をまとめ、小学校の支援の現状を考察した。
 - ・ 市内小学校における支援の実態及び成果と課題
 - ・ 市内小学校におけるSCの活用状況及び成果と課題
- ② 抽出校における実践や取り組みを以下の3点に分類してまとめ、その結果から小学校のニーズに対応するためのSC活用の方向性や方法を考察した。
 - ・ 各校への聞き取り調査の結果の概要
 - ・ 主なSC活用7点（カウンセリング、コンサルテーション、児童の行動観察、支援会議・ケース会議、訪問面接、研修会、関係機関との連携）について、具体的な様子や事例
 - ・ SC活用への要望

- ③ SCから聞き取った結果を、②と同様にSC活用内容7点についてまとめ、その結果から効果的なSC活用方法を探り、そのために必要となるSCと教員との連携について考察した。

3 研究のまとめ

(1) 本市の現状と課題

調査の結果、どの学校も不登校及び不登校リスク群児童に対し、支援委員会を活用し対応できる体制は整えられていた。またSC活用においても、積極的に活用し成果をあげていた。しかし、限られた勤務時間の中でのSC活用において、思うような活用ができず、各校とも苦慮していた。

(2) SCの直接的な支援から間接的な支援へ

不登校及び不登校リスク群児童への対応は、早期の支援と継続的な支援が必須である。その原因が多様化している現在、SCの心理的アプローチをより多くの児童・保護者へ活用することは、有効な手だてである。そのためには、カウンセリングを中心とした直接的なSCの支援から、コンサルテーションや支援委員会などへのSCの参加といった間接的な支援へ、その活用を見直していくことが必要であると考えられる。これによりSCからの支援の幅が広がるだけでなく、教員の教育相談における力量を高めることにもつながり、児童へより早くきめ細やかな支援ができると考えられる。またSC活用を間接的な支援中心へと見直すことは、時間的な問題の解決にもつながっていくと考えられる。

(3) SC活用のシステム構築

各校のニーズに合ったSC活用を行うために、SC活用のシステムを細かい部分まで構築することが必要である。さらに、毎年、SCとともにその見直しを行うことにより、より各校に対応したシステムが構築していくことができると考えられる。

(4) 今後の課題

今後は、中1ギャップの防止のために、小・中学校連携においてSC活用を考えていくことが必要であろう。またSC活用をより効果的に行っていくために、SCとの連携方法を今後も継続的に探っていくことが望まれる。

各研究の詳しい内容は、四日市市立教育センター教育情報データベース（市立小・中学校・幼稚園のみ閲覧可）をご覧ください。

(URL <http://yec.db.city.yokkaichi.mie.jp/>)

